

行曰杜桂卽爾雅木桂杜木音相近也

〔日本書紀神代〕一云以無目堅間爲浮木以細繩繫著火火出見尊而沈之所謂堅間是今之竹籠也于時海底自有可怜小汀乃尋汀而進忽到海神豐玉彥之宮其宮也城闕崇華樓臺壯麗門外有井井傍有杜樹カツノキ乃就樹下立之

〔釋日本紀述八湯津杜木〕

私記曰惟良大夫問云杜當作桂字之誤歟師說不詳

〔松屋叢考〕三樹考

桂は和名抄に兼名苑云楓一名攝和名乎加豆良云々また兼名苑云桂一名稜和名女加豆良云々字鏡に椿加豆良云々の椿は香木合字也本草倭名に楓樹一名攝一名格拒已上出兼名苑和名加都良云々古事記卷上に鳴女自天降到居天若日子之門湯津楓上云々神代紀上卷には湯津杜木之抄云々杜樹之抄なまた鹽椎神の火遠理命に教ていへるに其綿津見神之宮者也到其神御門者傍之井上ど書たりまた鹽椎神の火遠理命に教ていへるに其綿津見神之宮者也到其神御門者傍之井上有湯津香木云々訓香木云加都良云々神代紀下卷には井上有湯津杜樹枝葉扶疏と書たり万葉七のに向岡之若楓木下枝取花待伊間爾ユナケキルカモ嘆鶴鳴源氏物語花散里にかつらの木の追風にまつりのころおぼしいでられて云々○中略下學集草門木に木犀桂也云々など物におほくみえて此中に櫛ヲカシメを女加豆良木犀を乎加豆良とわけていへり櫛は實を結べば女にたとへ木犀は花のみ咲て實なきゆゑに男にたとへしなるべしいにしへ賀茂祭のはこの木犀なるを中比よりあやまりて白楊の類の木を用れどこはかほりもなくまた風なつかしきものならず○註又大嘗會に用る櫛を玉串といふも櫛は例の櫛にもあれ木犀にもあれ楠にもあれ櫛にもあれ常葉にて香き木をいへどそが中ことさらに玉串には丹陽木ヲカシメを用るゆゑの稱どもすべし俊頼朝臣の齋宮内侍にあひぐして伊勢に侍りける時六條修理大夫のもとへおくれる歌に